様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ１２８９８

研究課題名（和文）映画雑誌『キネマ旬報』にみるエイジングをめぐる産業的・批評的言説に関する基礎研究

研究課題名（英文）Basic Research on the Development of Industrial and Critical Discourses in Film Magazine Kinema Junpo on Aging

研究代表者
久保　豊（Kubo, Yutaka）

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：３０８２２５１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　2年間にわたる本研究期間中、1995年から2015年までに刊行された504冊の『キネマ旬報』を対象に、若さや老いをめぐる社会状況や言説の変化に応じた映画産業の製作・興行戦略と映画批評の動向について包括的な調査を行った。日本が高齢社会へ突入したばかりの1990年代後半から2000年代初頭までは、製作と批評のいずれも映画がいかに老いの経験を捉えることができるかに高い関心を示した。しかし、2000年代後半から2010年代では、製作が青春映画の流行を通じて老いよりも若さや「未熟さ」を重宝した一方で、男性中心主義的な映画批評は若さや「未熟さ」の表象に対して辛辣な視線を向けてきたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、『キネマ旬報』の検証で得た知見を戦後から現代までの日本映画の分析を通じて、映画学とエイジング研究を接合し、視覚文化にみる若さや老いを批評する方法論を発展させた点に見出せる。本研究は、異性愛規範的かつ男性中心主義的な超高齢社会・日本における若さと老いに対する表象と言説の分析を通じて、性的マイノリティや女性の老いが男性の老いよりも「未熟」で「劣る」とされるだけでなく、男性の老いをめぐる弱さを見えづらくする傾向を明らかにした。老いの複雑さ、弱さ、繊細さが映画や批評で不可視となり、それは実社会で老いを語りにくくしている傾向と共鳴すると明らかにした点が本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：During the two-year period of my project, I examined the film magazine Kinema Junpo, 504 issues in total published from 1995 to 2015. The aim of this examination was to conduct comprehensive research on how Kinema Junpo functioned as a platform for both the film industry and film criticism to respond to changes in social conditions and discourses around youth and old age. It turned out that, from the late 1990s to the early 2000s after Japan became an aged society, both the film industry and film criticism showed high interest in whether cinema could accurately portray the real-life experiences of aging. However, it became clear that, from the late 2000s to the 2010s, while the film industry heavily invested in the production of youth films as one of the most profitable genres, male-centered film criticism in Kinema Junpo harshly criticized the representation of youth and immaturity on the screen.

研究分野：映画学

キーワード：映画学　キネマ旬報　エイジング　若さと老い　セクシュアリティ　映画産業史　映画批評　ジェンダー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究を開始した当時、老いや若さをめぐる言説は従来の日本映画研究の枠組みにおいて主に映画批評においてしばしば見られるものであり、老いや若さの表象をめぐる映画理論や歴史、製作実践については体系的な学術研究が存在していなかった。英語圏の映画や文学に代表される大衆文化の研究において、若さや老いの表象や言説の分析に特化した研究は過去 20 年間で著しく進展してきた。なかでも、マーガレット・モーガンロス・ガレットの『文化によって年を取る』（2004 年）が果たした貢献度は高く、年齢を重ねる経験がジェンダーと同様に文化によって規定されるという主張は他分野に広く共有され、文化表現の事例として映画や文学を扱うエイジング研究の展開を押し進めた。特にクィア・スタディーズが 2000 年代から発展させてきた性にまつわる時間的規範性や再生産的未来主義をめぐる議論と親和性が高く、リンダ・ヘスの『アメリカ文学にみるクィア・エイジング』（2019 年）など、北米の映画や文学にみるエイジングに関する重要な学問知の蓄積へと応用されてきた。

他方、日本語圏においてエイジングの視点を映画分析に応用した最も示唆に富む先行研究には、社会学者・天野正子の『＜老いがい＞の時代――日本映画に読む』（2014 年）が挙げられる。1945 年から 1980 年代末までに公開された日本映画を主な対象に、天野は批評を通じて映画に描写された老いの歴史的変化を明らかにした。天野に加えて吉村英夫の『老いてこそわかる映画がある』（2004 年）もまた、作品批評が映画にみる老いを考えるための有効な方法論であることを示した。しかし、これらの先行研究は、どのように映画産業が特定の時代にみるエイジングの規範形成に寄与してきたのか、その可能性を十分に導き出しているとは言えなかった。

したがって本研究は、超高齢社会となった日本が「人生 100 年時代」を迎えるにあたり、映画がどのようにエイジングの規範に対して影響を持ってきたのかを明らかにすることを目的として開始された。「人生 100 年時代」における若さや老い、そして年齢を重ねる過程と映画の関係性を調査するためには、具体的な作品批評だけでなく、特定の年齢層に向けた映画産業の製作・興行戦略の歴史的文脈化の方法論として映画雑誌上の言説を分析する重要性が益々高まっていくと考えた。

そこで本研究が選択した研究対象が映画雑誌『キネマ旬報』であった。1919 年の創刊以降、各時代の日本映画産業の状況や展開を詳述するだけでなく、映画批評家や読者投票による批評を掲載することで日本における映画研究・映画批評の土台を作り上げてきた重要な媒体である。映画が社会における若さや老い、エイジングの規範の形成に密に関わり、その規範を強化・再生産するメディアであると仮定する場合、『キネマ旬報』はその過程においてどのような役割を果たしてきたのか。『キネマ旬報』にみる特定の年齢層を対象にした映画産業の製作・興行戦略と映画批評にみる若さや老いに関する言説を分析することで、その可能性を探究することができるのではないか。その可能性の根底にあるのは、どのような映画産業の制度的文脈なのか。そうした文脈は、エイジングの規範形成が行われる上で、日本映画のどういう形式的側面や物語的主題の傾向を明らかにすることに貢献してきたのか。あるいは逆に明らかにすることを妨げてきたのか。これらの問いに答えることで、英語圏のエイジング研究に学びつつ、同時にそれを日本映画研究に応用する際の限界を乗り越えるために必要な視点や方法論を構築できると考えた。以上に述べたことが、研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、1995 年から 2015 年までに刊行された『キネマ旬報』を包括的に調査し、若さや老いに関する言説が映画産業の製作・興行戦略と映画批評にどのように表れているかを見極めることであった。そのために、調査対象期間を日本が人口統計の観点から高齢社会となった 1995 年を出発点とし、超高齢社会となった 2007 年を中間点と捉え、さらに渋谷区の同性パートナーシップが開始された 2015 年までの 20 年間とした。この 20 年間の『キネマ旬報』を精査し、産業としての日本映画が若さや老いの何に注目し、どういった視点から何を目的にどのような方法を用いて特定の年齢層を対象にした製作・興行戦略を進めてきたのかを調査し、エイジングの視点から 1995 年以降の日本映画産業全体を概略した。次に映画批評の地位を再検証し、それが批評の根底にあるエイジングへの問題関心や映画産業の戦略評価とどう関係しているのかを解析した。なかでも特に重要になったのが、『キネマ旬報』で批評家や読者が選ぶ年間ベストテン作品と実際の興行収入成績との間にある評価基準の類似性と差異の検証であった。なぜなら、批評言説を映画産業の緻密な戦略の結果である興行成績と比較することで、若さや老いが誰によって、いつ、どのように特権化され、あるいは排除されるのかを明瞭に示すことができると考えたからだ。こうした問いに対する答えを探究し、『キネマ旬報』上の言説分析を通じて、エイジング規範の形成・強化・再生産に対して日本映画産業が果たしてきた役割を明らかにすることが本研究の計画であった。

３．研究の方法

本研究の基本的な研究方法は、若さや老いをめぐる社会状況や言説の変化に応じた映画産業の製作・興行戦略と映画批評の動向について『キネマ旬報』を総合的に検証し、批評家や読者か

ら高評価を得た映画作品と実際の興行収入成績との比較を通じて、若さや老いに関する重要作品やジャンルを選定し詳細に分析することであった。具体的には以下の通りである。

第一年目は、1995 年から 2006 年までに刊行された 288 冊の『キネマ旬報』を調査対象とした。第一に、日本の高齢社会化という時代背景に着目しつつ、若さや老いを主題とする作品に関する記事を調査・収集し、内容に従って整理・分類した。第二に、高齢社会化に映画産業が順応する過程で製作・公開され好評を得た映画作品の形式的・物語主題的な特徴を明らかにするために、批評家による批評家による「キネマ旬報ベスト 10」および読者投票による「読者のベスト・テン」と興行収入成績ランキングを比較した。第三に、『午後の遺言状』(1995 年)や『百合祭』(2001 年)など、女性の老いを主題とする作品群を対象に、男性の老いや若者の表象との比較を通じて、女性の老いにしばしば隠蔽される性的欲望やセクシュアリティの不在について検証した。

超高齢社会という時代背景に着目した第二年目は、2007 年から 2015 年までに刊行された『キネマ旬報』216 冊を調査対象とした。2000 年代半ばから 2010 年代の日本映画産業は、邦画作品の興行収入が洋画作品を上回り、その一因として特に少女漫画や恋愛小説を映画化した青春映画ブームによる貢献が考えられた。そこで第二年目は、青春映画が映画産業から興行的信頼を得る一方で、なぜ映画批評家は青春映画を軽視する傾向にあるのか、なぜ若さは未熟とされ、老いが特権化されるのかについて、薔薇族映画やクィア映画研究の知見を援用して検証した。

４．研究成果

申請者はこれまで、日本映画におけるクィアな表象について戦後から現代までを対象に研究を行なってきた。英語圏で発展してきたクィア・スタディーズとそれを用いたクィア映画研究の知見を援用しながら研究を進める過程で、若さや老いといったエイジング（加齢）の経験がどのように映画をはじめとするポピュラーカルチャーによって規範化され、その規範によってどのような人々のエイジングが抑圧・排除されてきたのかを調査してきた。映画学・エイジング研究・クィア・スタディーズを融合させる取り組みは国内外の研究においても比較的新しいアプローチであり、申請者の研究は、日本国内ではこれまで十分に注目されてこなかった当該アプローチを映画雑誌『キネマ旬報』の実証的な調査と映画作品の分析から大きく発展させることを目指した。

『キネマ旬報』を通じた映画製作・興行と映画批評にみるエイジングに対する言説は、当初計画で想定していたほどには 1995 年から 2015 年までで劇的に発展することはなかった。日本が高齢社会に突入してから 2000 年代初頭頃までは性別や性的指向に関係なく、幅広い形で老いが描かれており、映画批評家と雑誌読者は共通して老いを描く作品に対して高い評価を残していた。しかし、2000 年代半ばから映画産業が青春映画への投資を続け、それらの青春映画は安定していたにもかかわらず、青春映画と特にそこで描かれる若い女性の「未熟さ」は批評家から辛辣な評価を受けていたことがわかった。その辛辣さは 2010 年代後半になって緩和されるものの、本研究が対象とした 2015 年まで、（男性）批評家たちの多くは一貫して青春映画にみる「未熟さ」と女性の老いの表象を男性の老いよりも劣るものとし、男性の老いを描く作品の深さに酔いしれ、男性俳優の老いを高く評価する傾向にあった。ただし、本研究は映画製作や批評によって男性の老いをめぐる弱さが見えづらくなっている点を明らかにしただけでなく、老いの複雑さ、弱さ、繊細さが映画製作や批評で不可視となり、それは実社会で老いを語りにくくしている傾向と共鳴するという結論に至った。

また、本研究を開始した年度に新型コロナウイルスの感染が爆発的に拡大したことにより、若者と高齢者を分断する言説がメディアを通じて顕著になったことは、少子高齢化が深刻化する日本社会において高齢者に対して時に冷ややかに向けられる「役に立たなさ」への批判を顕在化させた。加えて、映画製作や映画批評においても、次世代再生産を目的とした異性愛規範的制度の維持に対して「役に立つ」若さや老いが優先的に語られる傾向にあり、その傾向は年齢だけでなく、性的指向、ジェンダー・アイデンティティ、障害の有無などにより、社会から「役に立たない」とされる人々のエイジングを映画や他のメディアにおいて不可視にさせる可能性を生じさせることがわかった。今後の展望としては、高齢化の波による福祉や医療への影響を十分に踏まえた上で、渋谷区や世田谷区で同性パートナーシップ制度が開始した 2015 年以降の映画やその他の映像メディアにおけるエイジングのあり方と役割を今後さらに検証していく必要性があるだろう。

本研究の具体的な成果としては、以下に記すように、単著の刊行、書籍や雑誌での論文執筆や、国際／国内学会での報告を挙げておくが、第一年目には本研究の初期段階で判明していた 2000 年代から 2010 年代の日本映画にみる性的マイノリティの若さと老いの表象について、申請者はキュレーションに関わった早稲田大学演劇博物館 2020 年度秋季企画展「Inside/Out――映像文化と LGBTQ+」で大きく取り上げることができた。1995 年以降の『キネマ旬報』で取り上げられた老いをめぐる作品批評は基本的に異性愛者の物語に焦点を当てたものがほとんどであった。そのため、映画批評で語られることのない性的マイノリティの老いとその映画的表象について 20 世紀末の成人映画や現代のクィア映画にみる老いの描写の比較を通じて明らかにし、その成果の一部を展示として無償で公開できたことは、研究成果を社会に還元する一つの方法になったのではないかと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 久保豊	４．巻 52
２．論文標題 ドロシーの友だち同士の往復書簡	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 80-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Yutaka Kubo
２．発表標題 Politics of Aging in Queer Cinema in East Asia and North America
３．学会等名 Transcultural Cinema Forum（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保豊
２．発表標題 オムライスに描く『家族』への欲望――日本のクィア映画にみる食卓――
３．学会等名 2021年度昭和文学会秋季大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保豊
２．発表標題 役に立たざる者たちの老い
３．学会等名 日本映画学会第17回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yutaka Kubo
２．発表標題 All Checked on End-of-Life Planning: Portrayals of the Aged and Useless Women in Japanese Cinema during the 1950 & 1960s
３．学会等名 Society for Cinema and Media Studies 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計7件

１．著者名 谷川 建司 編	４．発行年 2020年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 424
３．書名 映画産業史の転換点――経営・継承・メディア戦略	

１．著者名 久保　豊	４．発行年 2022年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 304
３．書名 夕焼雲の彼方に――木下惠介とクィアな感性	

１．著者名 菅野　優香 編	４．発行年 2021年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 196
３．書名 クィア・シネマ・スタディーズ	

１．著者名 Coates, Jennifer & Ben-Ari, Eyal (eds.)	４．発行年 2021年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 232
３．書名 Japanese Visual Media: Politicizing the Screen	

１．著者名 河出書房新社編集部	４．発行年 2021年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 208
３．書名 『シン・エヴァンゲリオン』を読み解く	

１．著者名 久保豊編	４．発行年 2020年
２．出版社 早稲田大学演劇博物館	５．総ページ数 124
３．書名 『Inside/Out　映像文化とLGBTQ+』	

１．著者名 志村三代子・角尾宣信 編	４．発行年 2020年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 26
３．書名 『渋谷実 巨匠にして異端』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔博物館展示〕 久保豊「Inside/Out――映像文化とLGBTQ+」、早稲田大学演劇博物館2020年度秋季企画展、2020年9月ー2021年1月

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関